

避難所において看護職が担うコーディネートに関する研究

(作川真悟、日本災害看護学会誌 2018; 20: 3-13)

2019年2月8日災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

I. 緒言

災害が発生すると、避難した住民を危険性がなくなるまで滞在させる為に避難所が開設される。しかし、避難所での集団生活によるストレスは多大な影響を与える。そこで、今後の避難所活動における被災者への心身への影響を最小限にする為には看護職がどのような視点でコーディネートを行う必要があるのかを明らかにする必要がある。

II. 方法

熊本地震発災一か月以内の避難所においてコーディネートを行った看護師6名を研究協力者とし、半構成的面接法により「看護の視点における構の実際」についてデータ収集し、概念ラベルを作成した。概念ラベルの中から性質ごとに関連のあるものを集めサブカテゴリー、カテゴリーを生成した。

III. 結果

カテゴリーは、【日常生活の自立を支え被災地につなぐ】、【さりげなく被災地の支援者を支える】、【効率的な生活環境の把握と調整】、【多職種と役割共有を認識】、【限りある資源分配への臨機応変な判断】、【危険を察知し安全を確保】、【避難者に負担をかけない情報共有】の7つであった。

IV. 結論

避難所では、被災者個々との相互の関係性からなるカテゴリーと、避難所内全体の生活への関心からなるカテゴリーのコーディネートが行われていることが明らかとなった。今後の支援の方向性として、被災者個々に目を向けた自立を支える視点と、避難所を俯瞰しながら生活環境と健康管理を行う視点が重要であることが示唆された。

V. 考察

内閣府による防災情報「広報ぼうさい」では、「被災者中心の支援が重要で、被災者への心配りを忘れず、不用意な発言や、自分の経験による判断を押し付けることなく、被災者の気持ちや立場に配慮した支援を心がけなければならない。」と述べている。

コーディネートする上で災害の経験や知識は役立つこともあるが、自分の価値観

や考え方は、時に押し付けの支援になりかねない。その為、避難所の責任者や被災者の声を聞きながら、被災者の自立を考え自主性を尊重しなければならない。

また、先行研究では自治体職員として働くことは、組織内においても家庭や地域の一員としても様々な葛藤をもたらし、それがさらなるストレスとなり、そして心身の反応や業務への影響をもたらすことが分かっている。被災者、支援者個々との関係性を築くために、被災者の気持ちに寄り添おうとする姿勢でコーディネートする必要がある。

生活環境と精神面の関係において先行研究では、避難所等を中心にした生活の中、自宅の片づけなどで心身ともに大きなストレスを受けることが報告されている。精神的なストレス軽減の視点からも早期から避難所全体の生活環境を整えることが重要であると考ええる。

VI.課題

本研究から生成された看護のコーディネートは、避難所ごとの特性や問題、また活動組織の体制や活動期間などの違いがある中での活動であり、被災何日後の事象なのかを明確に示すことが困難であった。

今後は保健師や助産師が行ったコーディネート活動についても調査を行い、看護師の中でもさらに役割に応じたコーディネートを明らかにしていくことも重要であると考ええる。